

安全・安定供給の最前線を担う

地震、台風、豪雨——日本列島を次々襲う自然災害により、停電が相次いだ2018年。
一刻も早い電力復旧に全力を尽くす若き配電マンの姿を追った。

最強台風21号襲来

2018年9月、関西を中心に東海・北陸など各地で大きな爪痕を残すことになる台風21号が襲来。直撃を受けた関西各地の最大瞬間風速は45〜58メートル／秒にも達し、広範囲に甚大な被害をもたらした。暴風による飛来物や樹木倒壊、土砂崩れによる電柱の折損、電線の断線が発生し、関西電力管内で最大約170万軒が停電。関西電力は当初約8000人だった要員を約1万2千人まで増員して復旧にあたったが、被害の範囲が広く、倒壊した樹木が道をふさぎ、復旧作業に入れない場所もあり、作業は難航した。

昼夜兼行の復旧作業

送配電カンパニー大阪南電力本部大阪南配電エンジニアリングセンター（以下配電EC）に所属する松尾雄樹は大阪府南部の岸和田配電営業所に派遣され、折れたり傾いた電柱の仮処置や電線の復旧、トタンや看板など飛来物の除去、倒壊した樹木の伐採・除去など、多岐に亘る復旧作業にあたった。

配電ECを出発し岸和田方面へ車で向かった時、道路脇の電柱はあちこちで傾

まだか」「早く点けて」といった声を聞いた。日が経つにつれて、お客さまが焦り苛立つ様子が肌で感じられ、心苦しく思うことも多かった。

それでも電気が点いた瞬間、ほっとした顔で「ありがとう！」と言ってくださるお客さまの声に、頑張って良かった、この仕事を選んで本当に良かった、と、やり甲斐を実感したと松尾は笑う。

迅速に安全に

松尾は入社7年目。福岡県の高校の電気科で学ぶ内、電力会社に興味を持った。「サッカークラブで体力には自信がありました。電柱に昇り、お客さまのすぐそばでライフラインを守る仕事がしたい」と関西電力に入社。能力開発センター、配電ECでの研修を経て、和歌山県の橋本営業所で3年間配電業務を経験。16年に配電ECに戻ってきた。

普段は配電設備の新設工事などに携わりながら、自然災害などで停電が発生した際には、一刻も早い電力復旧のため現場に駆けつける。そのための準備も日々の業務の一つだ。

特に高圧発電機車などの特殊車両を使った応急送電や工事機会の少ない地中線設備の復旧作業を繰り返し訓練し、災害

台風21号復旧現場



大阪南配電ECにて高所作業車出動準備

き、信号は消えていた。今まで見たこともない光景に目を疑った。

お客さまに一刻も早く電気を送らなければ——それから数日間は何眠を取るだけで、昼夜兼行の復旧作業を続けた。大きな飛来物や倒木もあり、夜通しの作業は体力を消耗する。それでも迅速かつ的確に、安全に配慮しながら力を尽くした。その後も設備の巡視やお客さま対応など1カ月に亘り復旧作業に従事した。

「早く点けて」の声に押されて

台風21号による関西エリアの停電は、完全復旧まで2週間以上を要した。平野部ではほぼ1週間以内に解消したもの、台風被害が山間部など広範囲に及び、倒木などにより現場作業に取りかかれないエリアもあったためだ。

現場に出るたび、お客さまの「うちは



大阪南配電ECの松尾

現場で迅速で安全に作業できるよう努めている。

熊本・広島の現場でも

松尾は、16年4月の熊本地震、18年7月の西日本豪雨の際に、九州電力、中国電力の要請に応じて関西電力が派遣した復旧応援隊の一員として現場に駆けつけた。

熊本では、自分のふるさとである福岡の状況も気になるものの、現場の復旧活動に専念。広島では先陣を切って高圧発電機車で停電地域に入り、応急送電を行った。応急送電は夜通しの監視が必要。6人1班の交代制で24時間体制の復旧作業にあたった。どこの現場にあっても、一刻も早く電気を送りたいという一心だ。

日々技能を磨く

配電ECは、災害復旧応援のほか、平時は管内の配電営業所と連携して設備の新設や修繕工事、新工法の開発など、さまざまな実務を通じて現場をバックアップする。

松尾が現在力を入れているのは、絶縁棒を使った間接活線作業だ。これまでの配電工事は樹脂やゴム製の保護具を装着し通電中の電線（活線）に直接触る「直

編集後記

6月の大阪北部地震、7月の西日本豪雨、9月の台風21号・24号、北海道胆振東部地震、と自然災害が相次いだ2018年。

今号のテーマは「防災・減災」です。荻本和彦さん、多々納裕一さん、阪本真由美さんにお集まりいただいた[鼎談]では、電力をはじめとするインフラ対策も視野に、防災・減災をめぐる現状、あり方、課題と方策を考えました。続く[オピニオン]では、「気象災害」「地域防災」「インフラ」の各面から防災・減災への視点について識者・専門家に提言をいただきました。

電力の安定供給の重要性が改めて指摘されるなか、[かんでんFocus]では、送配電ネットワークがどのように運営されているかについて訊くとともに、[現場力ノ最前線]では、一刻も早い電力復旧に全力を尽くす若き配電マンの活動を追いました。

そうしたなか関西では先頃、2025大阪万博開催が決定、少し明るい兆しが見えてきました。災害の連鎖には歯止めをかけ、幸運の連鎖を起こしたい――[旬発NIPPON]では、2019年夏の世界遺産登録をめざす「百舌鳥・古市古墳群」を紹介。[Person]では、どんなときでも楽しんで豊かに生きることを示唆してくださる料理研究家・大原千鶴さん取材しました。

2019年が良い年になりますよう、願いを込めて、新しい『躍』をお届けします。(T)

躍

題字 森 詳介(関西電力株式会社 相談役)

『躍』(やく)という誌名は、皆さまとともに「躍進」「飛躍」していきたい、また皆さまにとって「心躍る」広報誌でありたい、との思いを込めて名づけました。

『躍』の内容はホームページでもご覧いただけます。
<http://www.kepco.co.jp/yaku/>

発行●関西電力株式会社 広報室
発行人／松倉克浩 編集人／近藤賀彦
〒530-8270 大阪市北区中之島3丁目6番16号 電話06-7501-0240
企画／編集●株式会社エム・シー・アンド・ビー



線活線工法」が主流であったが、危険と隣り合わせの上、特に夏場は厳しい作業環境を強いられた。このため関西電力は、絶縁棒などの工具を用いた「間接活線工法」を16年から本格導入。配電ECではこの新工法を使いこなせる技術者を増やすため、積極的に訓練に取り入れている。「配電営業所ではなかなか使う機会のない工具も配電ECにはいろいろあるので非常に勉強になります。ここですっかり技術を身につけて、将来は責任者として工事に臨みたい」と意気込みを語る。

南海トラフに備える

まだまだ学ぶことばかりだという松尾。しかしその表情からは、20代半ばとは思

大阪南配電ECは若手社員育成の場でもある



日々の訓練で腕を磨く

絶縁棒を使った作業の訓練

えないほどの落ち着きと自信が感じられる。思わず、「どんな有事も想定内?」と意地悪く話を振ると、「有事に想定内はありませんが、いつでもどんな状況でも対応できるよう常に準備はしています」と頼もしい答えが返ってきた。「南海トラフで大地震が起き、津波で電柱や電線も全部流されることもある。となると、何もないところにイチから電柱を立て、電線を引き、電気を送らないといけない。そんな非常時にも自分の役割を果たせるよう、技術向上に努めたい」きっぱりとした口調でそう語る松尾の言葉を聞き、指導役の吉本哲朗主任は嬉しそうに大きく頷いた。

「松尾君のような若い配電マンが責任感と使命感を持って業務にあたっていることは非常に頼もしい。安全・安定供給には技術力の維持・向上が何より重要。ここでさらに経験を積み、近い将来、平時にも有事にも現場を統率できるリーダーとしての活躍を期待しています」と目を細める。

日々、社会や暮らしを支える使命を果たすため、松尾は常に臨戦態勢を崩さず、今日も技能・技術研鑽に励んでいる。

躍

